

エンジェル・ヘア

松本健一



文藝春秋

エンジェル・ヘア

松本健一



エンジェル・ヘアー

一九八九年五月一五日 第一刷

著者 松本健一

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三ー二三

印刷 大日本印刷
製本 大口製本

© Kenichi Matsumoto 1989 Printed in Japan
ISBN4-16-310950-1

定価はカバーに表示してあります

万一落し乱丁の場合はお取替いたします

目次

エンジェル・ヘアー	5
アメリカざりがに	37
メイド・イン・オキユパイド・ジャパン	75
真鍮磨き	111
熊野・進駐軍クラブ	151
星条旗よ永遠に	181

エンジェル・ヘア

カバー、扉写真
ジエターノルフ
エーレイス

エンジン・ヘル・ヘアー

風花の舞う町で

空の奥がかすかに光った。きらっ。

明かるさと青さをとりもどしはじめた冬の終わりの空の奥が、きらっ、と光ったとみるまに、空一面がきらきら、きらきら、ゆっくり銀色に耀やきだした。

(風花とちがうか、あれ。)

小学校の帰り道に、誰かがいった。家の方角が同じ、大工の孫、フィリピン、多幸、そしてわたしの四人組が、家の近くまで来たところだった。

見上げると、赤城山の頂きの部分が白く、まだ雪が残っているのがわかる。春近くになつて、すこし強い風がふくと、町の二十キロぐらい北側にそびえている赤城山から雪がふきと

ばされて、風花になって舞いおりてくるのだった。

風花は降ってくるだけで、積もらない。北からの風が一定の速さをたもっていれば、かなり長い時間、といつても一時間かそこらだが、舞いおりつづける。ただ、空中の温度も、地表の温度も、春がちかいたため、やや高くなっている。上空にあるときには、太陽の光りをうけてきらきら耀やきつづけるが、地表ちかくに達すると、ほとんど溶けてしまうのだ。

掌で受けても、あつというまに、なくなってしまう。あとには、それが雪であった証拠の、小さな小さな水滴が残る。冷めたいというほどではない。それくらい、周りには春の気配がただよいはじめているのだ。

(ああ、春なのかな。)

赤城山の頂きに雪が白く残っているのを目のはしで捉えながら、わたしの体はなんとなく浮き立った。わたしばかりでなく、仲間の小学生たちはみな、空に両手をつきだしたり、傘をひろげて風花を受けとめようと、宙に身をのりだしたような格好になっている。

しかし、風花はなかなか舞いおりてこない。きらきら、きらきら、なかぞらに漂っていて、空全体をやわらかな銀幕にかえてしまっている。風花ならとつくに掌に水滴を残したり、頬に心地よい冷めたさをもたらししてくれるはずなのに、空からなかなか降りてこない。

ひとつ、ふたつ、舞いおりてきた。と、おもつて、掌を差し出すと、ふわり、と逃げてしまふ。それどころか、その空気の動きに反応したごとく、銀の風花はふたたび宙に舞いあがってしまうのだ。

（妾だな。こんな風花、あったかしら。まるで、たんぼぼの綿毛のような軽さだ。いや、風花だって軽いのだが、差し出した掌から逃げだすような、そんな巧妙な真似はしない。それに、この風花にはたんぼぼの綿毛のような、ほんのりとした温かさがあるような気がする。）

母親が貪しい家並がつづく地域なのに多幸という名を持つ土地の出身であるため、「多幸」というアダナになったタカオのほうをみると、やはり風花に逃げられたらしく、宙をつかんだ面持ちで首をかしげている。さっきまで歓声をあげて両手をつきだしていたのに、いまは狐につままれたように黙っている。

すると、大工の孫、これは大工がノリオの名まえをよばず、孫としかいわないので、「大工の孫」というアダナになったのだが、かれが、わかつたぞ、というような顔をして、叫んだ。

（こりゃ、風花じゃない。姉さんの彼氏に教えてもらったことがある。エンジェル・ヘア

「だ。だって、冷めたくもないし、溶けもしない。掴もうとすると、ふわり、と逃げるだろ。誰も手に入れることができないんだ。風花は陽に当たって銀色に光りながら下に落ちるんだけど、エンジェル・ヘアーはあるときには黄金色^{きん}つぼく光って空中に浮いて飛ぶんだ。」
 そういわれてみると、風花の雪片とおもわれていたものは、銀色のなかに黄金色がまじっているのか、ちよつと明かるく眩ゆい。

（エンジェル・ヘアーって、何だ。エンジェルっていうのは、あのキャラメル^{キャラメル}の箱に書いてある天使のこと？）

（そうさ。エンジェル・ヘアーっていうのは、英語でね。姉さんの彼氏の話じゃ、天使の髪の毛って訳すらしいんだ。アメリカ好きのケンジは知っているだろうが、天使は、金髪をして、空を飛べるんだ。その髪の毛が軽いのは、当然だろ。天使の髪の毛は、何か悪いことがおこりそうなとき、それを防ぐために飛ぶんだ、といていた。）

大工の孫は、得意そうに説明した。かれの姉は、進駐軍将校のオンリーで、わたしたちはいつも「おまえの姉さん、パンパン娘。ひとばん十円、さあいか、パンパン」と、そのパンパンのところを尻を叩きながら、囃したたてたのだった。すると、かれはいつも同じように「うちの姉さんはパンパンなんかじゃないぞ。将校さんと結婚するんだ。でも、いまはアメ

リカの奥さんが離婚してくれないから、仕方がないんで、オンリーになってるんだ」と顔を赤くして怒鳴り返すのだった。

かれの家の脇の歩道には、朝になるとよく、フォードのジープがとまっていた。それは夕方にはないのだが、朝になると、そこに置かれてあるのだ。だから、わたしたちはその「姉さんの彼氏」という進駐軍の将校がどんな顔をしているのか、あまりよく知らないのだった。それでも、休みの日などに、かつて中島飛行機の所有でいまは進駐軍に接収されている飛行場にかけていって、鉄条網の外から司令部のところを眺めていると、ゲートを固めたMPがジープに乗った将校に敬礼しているのがみえた。みんなピンク色の肌をして、碧い眼と高い鼻をもっていた。だから、将校といえは、ピンク色の肌と、碧い眼と、高い鼻をもつて、ジープののっている白人のアメリカ人のことだった。

(じゃあ、何か悪いことが起こりそうなの?)

(そんなことは知らーん。悪いことが起こらないように、飛ぶんだし……)

大工の孫の答えは、歯切れがわるくなつた。しかし、かれの答えで、これが風花ではなく、エンジェル・ヘアーだということを、わたしたちは納得してしまっていた。実際それは、手に掴もうとして掴めなかったし、いつまでも空中に漂っていて落ちてきそうもなかった。飛

んでいるというより、浮いているといった感じで、ふわふわ、その銀色の姿をいつまでもみせていた。ときにそれは、天使の髪の毛のように、温かい黄金色の耀やきをみせた。

みんな茫然と、その耀やきにみとれていた。すると、「フィリピン」というアダナをもつ、ロバートがいった。

（アメリカ人の金髪は、とっても柔らかいんだぜ。細くて、柔らかくて、まるでナイロンみたいなんだ。母さんがそういつてた。）

ロバートの父親は軍人で、戦争中フィリピンにいつていた。戦後帰ってきたときには、色の浅黒い、しかし目が大きくて綺麗なフィリピン人の嫁さんを連れていた。その嫁さんが日本に来てすぐ産んだのが、ロバートだった。

だから、ロバートが「母さん」というのは、そのフィリピン女性のことなのである。かの女はわたしたちの家の近くにある進駐軍将校宿舎のメイドさんをやっていた。アメリカ人の金髪についての話は、信憑性があつた。

わたしたちはそのフィリピンの「母さん」がつとめている進駐軍将校の宿舎に、一度だけだが、入れてもらったことがある。将校さんも奥さんも留守だった。ふだんは高いコンクリート塀に囲まれて、緑の屋根と白塗りの板壁がみえるだけで、あとはそのメアリーという

娘がひく幼稚なピアノの音がきこえてくるのを知るばかりだった。

家のドアには、外側に虫除けの網がかぶせてあった。わたしたちの家には、そんなものはどこにもなかった。家のなかに、本来なら茶色であるのにたくさんのハエがたかかったため真黒くなってしまったハエ取り紙が汚なくぶら下がっているのが、普通だった。ロバートの「母さん」は黒光りをしたピアノのある部屋に秘かに招待してくれ、甘いミルク・ティーをごちそうしてくれた。甘いものといえば、乾燥イモか麦こがし（わたしたちの地方ではそれを「こうせん」と呼んでいたが）ぐらいしか知らなかったから、進駐軍って何て素敵なものを飲んでいるんだらう、とおもったものだった。ピアノにかかった白いレースさえ、異国の香りがした。

（そうか、ナイロンみたいか。うちの姉さんが彼氏からもらったナイロンの靴下、さわって見たことがあるけど、ほんとうに軽くて、スベスベしていて、柔らかいぜ。ふうん、アメリカ人の金髪って、触ると、あんなんか。）

大工の孫のノリオはそういいながら、まだ宙に漂っているエンジェル・ヘアーのほうをみつめた。わたしももう手を下におろして、その、きらきらする、異国の天使の無数の金髪をみつめていた。

(何か悪いことが起こるんだらうか。いや、悪いことが起こることを防ぐんだから、良いことが起こるんだらうか。いずれにしても、外国には不思議なものがあるんだな。それは進駐軍とともに、日本にも来たんだな。)

わたしは幼ない頭で、目のまえのエンジェル・ヘアーの美しさを、なんとか理解しようとしていた。もつとも、家に帰ってからは、父や母にもその話はしなかった。話をすれば、進駐軍将校のオンリーであるノリオの姉さんの「ナイロンの靴下」や、ロバートの母さんが内緒で見せてくれた家の内部についても喋ってしまいそうだったからだ。

エンジェル・ヘアーはその後、二、三回も舞っただらうか。回数は、三十数年後のいまと違ってはあやふやである。しかし、その小学校帰りの最初の出会いだけは、忘れない。

朝鮮戦争がはげしくなると、空からはエンジェル・ヘアーではなく、模擬弾や補給物資の本箱が落ちてきた。近くの飛行場で行なう爆弾投下訓練や、朝鮮戦線へ送る補給物資の投下訓練の失敗だったのだらう。